

1844 年におけるマルクスの価値論

藤 森 俊 輔

1844年の「経済学・哲学手稿」を中心とするマルクスの経済学研究は、主として古典派の概念によって資本主義社会の諸事実を批判的に検討したものであり、みずからの経済学をいまだ持つにいたっていなかった最初期の研究として、いわば留保つきのものであった。¹⁾ したがって、その未熟さを指摘することは容易であるが、それだけになお、誤りは誤りとしてそれ自体に論理的な一貫性を与えてその意味を明らかにすることが必要となるであろう。一般に初期のマルクスの価値論は、たかだか労働の価値説の否定として考えられているか、あるいはエンゲルスとの関連から競争論との関係のもとに一面的に考察されているきらいがあるように思われる。他方では、《疎外された労働》の経済的具体的内容もいまだ充分には理解されていないように思われる。こうした傾向にたいして、初期のマルクスは、富の普遍的本質を労働と考へ、労働者は全生産物の生産者であると考えながらも、何故労働価値説を否定したのかを明らかにすることによって、見落されている問題の一面を明らかにできれば幸いと思うものである。44年の「手稿」においては、価値論に関する叙述はみられないが、同時期の「経済学研究ノート」において問題とされている。この抜粋と批判的評註からなるノートと「手稿」は切り離されて読まれており、その間に発展をみるのが普通であるようだが、私はこれをひとまず統一的に読んでみようと思うものである。

I

さてマルクスは労働の肯定的側面についてつぎのようにいっている。《対象的世界の実践的産出、非有機的自然の加工は、人間がひとつの意識ある類的存在であることの、すなわち類に対しては彼自身の本質として、自分にたいしては類的存在として相対するものであることの確証である。》(補4. p. 307.)。一般的にいて生産＝労働において人間が対象としての自然に働きかける限り人間の対象化＝客体化が行なわれ、対象＝物の主体化が行なわれる。この意味で《疎外された労働》は、内面的には労働共同体としての社会の基礎論理であるのだが、それではいかなる意味において類的存在の確証であり、労働共同体としての社会の基礎論理であるのだろうか？ たとえばマルクスは個別的な生産者間の社会的結びつきは、社会的行為、類的行

1) マルクス・エンゲルス選集。大月書店版。補巻4。296頁。以下、当選集に訳のあるものは訳のみをかかげ、補4。p. 296のごとく略記する。訳のないもの、たとえば、Marx-Engels Gesamtausgabe Abt. I. Bd. 3, S.450を、MEGA Ⅱ, S.450.のごとく略記する。

為である労働のためである、と「ミルへの評註」でいっている。

《われわれが人間として生産したと仮定しよう。そうすれば、われわれはそれぞれ自己の生産で、自己自身と他人とを2重に肯定したことになる。1. 私は私の生産において私の個性とその独自性を対象化する。したがってその活動の間に個人的な生命発現をたのしむとともに、対象物の観照において、個人的な喜びと私の人格性を対象的な、感性的に観照しうる、またそれ故に疑問の余地のない力として知ることを味わうであろう。2. 私の生産物を汝が享受あるいは使用することのうちに、私は私の労働によって人間的な欲求を充足し、人間的な本質を対象化し、他の人間的な存在の欲求にそれにふさわしい対象を供給したと意識し、3. 汝にとって私は汝と種属 *Gattung* との媒介者であったと感じ、したがって私が汝の思惟と身体とにおいて、確証されていると意識し、4. 私は私の個人的な生命発現によって直接に汝の生命発現をつくりだし、したがって私の個人的な活動のうちに私の真の本質、私の人間の本質、私の社会的本質を確証し、実現したと意識する喜びを直接に味わうであろう。》(MEGA. Ⅳ. SS546~547)¹⁾ ここでは、私の労働と汝の欲求が相互依存の関係にあって、私の労働はそのような汝の欲求に供給するが故に、《我と汝の統一》であるとされている。この場合、欲求は他の労働の生産物に依存しているがゆえに社会的なものであり、したがって交換によってある物を所有するということは、《私の本質をわがものとする》(ibid. S. 538)である。他方、労働はこれら社会に存するさまざまな欲求に対応する社会的総労働の一環として他に生産物を供給するのであって、この意味で労働は労働共同体の基礎であり、社会はこの類の行為としての労働の対象化なのである。したがって、このような労働と享受、生産と消費、供給と需要の関係の全体が、人間の類の本質であって、労働はこの本質を対象化するのである、といえよう。本来的な人間関係のもとでは、人間の欲望が豊富であること、人間が新しい欲望をもつということは、それに対応する豊富な物を持つことであり、生産の新しい対象が獲得されるということである(補4, p. 359)、というマルクスは、また労働と享受のこの統一が自覚的になされることに、人間の人間たる点を認めている、と考えられる(同. pp. 307~308)。こうしてみると、マルクスが1868年7月11日のクーゲルマンあての有名な手紙の中で、社会のさまざまな欲望に応じる種々の量的に規定された生産物を提供するために、社会の総労働を諸種の生産部門に一定の比率で配分するという必要は、一般的に人間社会に妥当する超歴史的自然法則だ、という言葉に見合うものが、初期における類の本質といわれるものであることがわかる。マルクスは、その価値論で、私的所有の存在する社会では、この自然法則がどのように現われるか、という価値の本質論を展開している。²⁾

マルクスによれば私的所有の下における疎外された社会関係においても、それがともかくも疎外された社会関係をもちうるのは、生産的实践のこの類的本性が内面に存在するからである。古典派のいうように、交換ならびに取引が、人間を社会的存在として他者に結びつける類の本質なのではない。スミスにあっては、種々の才能を有する人々が、それぞれの生産物を《交換性》向によって *Common stock* のなかを持ちより各人はその共同資財のなかから必要なだけ買うことができるのだ、(『国富論』大内訳(一) p. 44) と考え、

1) 「ミルへの評註」に関しては、重田晃一、「初期マルクスの一考察」(関西大学経済論集, 8巻, 6号)がくわしい。なお引用訳文は同論文から若干利用させていただいた。

2) 杉原四郎氏は、エンゲルス「国民経済学批判大綱」について、このことを指摘されている。重田氏も同じ。

この労働と享受の様式を《市民社会》もしくは《商業社会》とよんでいる。このように、社会的分業にもとづく労働の生産物の商品としての交換が、社会存立の基本的条件をなしている。あるいは人間と人間を結びつける類の本質をなしているという考えに対して、マルクスは、《国民経済学は社会的交通の疎外された形態を、人間のふさわしい、本質的で根源的な交通として固定化している》(MEGAⅢ, S. 537), あるいは《疎外の内部にある労働の社会性》(補4, pp. 376~377)をそのまま本来の分業として把握しているのである、としている。マルクスによれば私的所有のもとにおける交換は、交換の本質である人間の類的活动の媒介的本性が疎外された形であるものにすぎない。すなわち、私的所有によって相互に孤立させられた個人は、相互に一定の価値関係に入る物の運動の形で結びつけられるのであって、この関係はもはや人間が労働共同体としての社会を対象化することによって、その人間の本質を確認するような、労働の類の本質を直接に実現するような社会的結びつきではない。価値という範疇は、人間の本質を示す社会関係の表示ではなくて、私有財産と私有財産の関係を示す範疇である。すなわち、私有財産と私有財産は交換において等置されることによって、相互に他の自然生産物の同等物として現われ他者の定在の代理物、《つまり等価物になる。直接に自己自身との統一においてある代わりに、私有財産はいまではもはや他の私有財産との関係として存在しているにすぎない。かくて私有財産は価値、直接には交換価値となる。》(S. 538)。このような《価値としての私有財産の定在は、私有財産の直接の定在と区別された、私有財産に特有の本質にとっては偶然な規定であり、私有財産それ自体の外在化された規定であって、この規定の相対的な定在であるにすぎない。》(S. 538)。この価値の《価値としての現実的存在が貨幣》(S. 532)である。すなわち、この価値および貨幣においては、もはや私有財産の直接的即自的規定、つまり労働の生産物であり、かつ有用物であること、つまり私の労働が生産し汝の欲望に供給するものであり、したがって社会的本質の対象化たることは捨象されて、私的所有と私的所有の《抽象的關係》のみがそこに表示されているのである。こういう意味で価値および貨幣からは《人格の本性》が捨象されている、といわれる。これは具体的には次のようなことであろう。貨幣は私的所有の自己疎外として、外部に感性的直接的に自立している。したがってこの貨幣は、今や自己目的として追求されることになる。《だからそれは、世界全体から、人間界からも自然界からも、それらに固有の価値を奪ってしまった。貨幣は、人間の労働と定在の本質でありながら人間から疎外されたものであり、そしてこの疎遠な存在が人間を支配し、人間はこれを礼拝する》(補4 p. 411)市民社会の神となるのである。44年の「手稿」の第3手稿「貨幣」で指摘されていることは、まったくこのことに他ならない。以上は、類的活动たる労働の生産物の交換を問題としたが、他方でこの交換を《相互の欲望の交換》(補5, p. 200)としてみるならばどうであるか? マルクスによれば、私的所有のもとでの必要をみたすための交換は、もはや《私の本質をわがものとする》ことではないし、また生産との内的な関連を失ってしまっている。すなわち、相互の欲望の交換は販売と購買となっており、したがって他人の欲望はたんなる彼自身の利己的な欲望の充足の手段であるにすぎない。その結果、他人にあらたな欲望を喚起させ、それだけ対象の量をますことによって多くの貨幣をえようと試みる。《あらたな生産物はすべて相互的な詐欺と相互的な掠奪とのあらたな産出力である。》(補4, p. 359)。こうした意味で、《私有財産は自然のままの欲望を人間的な欲望とすることができない》し、《貨幣欲だけが、国民経済によって作り出される真実の……かつ唯一の欲望》となるのである(同, p. 359)。

以上で明らかなように、一方では労働の生産物は交換において《価値》という《私的所有間の抽象的関

係」となることによって、私有財産の直接的即自的な規定が捨象され、貨幣においてはまったく生産の動機が欲望と切り離され、価値の抽象性が完成される。他方、欲望はこの抽象化と見合って社会との内面的つながりを失い、貨幣欲のみが唯一の現実的な欲望となるのである。こうして生産＝労働は、私的所有制のもとではたんなる私的労働＝営利労働すなわちなら享受や欲求との関連もなしに、貨幣を追求するための手段となった労働によって行なわれ、(MEGA Ⅲ, S. 539)《疎外された労働》の肯定的側面は捨象されてしまっているのである。労働の社会性、あるいは労働の人間的本性は、私的所有と矛盾するのであり、こうした意味で《価値》および《貨幣》は、《人間の自己疎外》なのであり、またこのような疎外された社会においては、労働と享受の自覚的統一は不可能であり、生産は無政府的とならざるをえないのである。44年の価値論のひとつの意味はこのことに他ならない、と思う。

II

さて以上の議論とほぼ同じようなことを、エンゲルスは、《価値とは生産費の効用に対する関係である》といい、これを《価値概念の本来の領域》とよんでいる(補5. pp.206～207)。マルクスもまた《国民経済学ではもはや市場価格しか取扱わないから、物はもはやその生産費と関連させては、また生産費は人間と関連させては、考察されず、生産全体が商売と関連させて考察されるのである。》(MEGA Ⅲ, S.502)とのべており、前節における価値における人間の自己疎外の問題は、価値がもはや生産費によっては規定されない、という点においてもまた考えられていたようだ。もっとも、この点については、「リカードからの抜粋に対する評註」と「手稿」および「神聖家族」の間には重要なへだたりがあるようだ。すなわち、前者においてマルクスはリカードの労働はすべての価値の源泉であり、その相対量は諸商品の相対価値を規制する尺度である、という命題を批判して、《リカードは、資本もまた労働であるから、労働は価格の全総和を包括すると説明している、セイは本書25頁の註で、リカードはただで提供されるのではない資本と土地との利潤を忘れたのだ、と指摘している。ブルードンは、そこから正当にもこう結論している。私的所有が存在するところでは、物の価格はその価値よりも大きい、これすなわち、私的所有者への貢物である、と。》とのべている。(MEGA Ⅲ, S.494)ブルードンは商品生産を前提し、もし l'aubaine 財産没収権としての資本等々を廃止するならば、等価交換が実現し、各生産者は価値通りの労賃を支払われるであろう、と考えた。ブルードンによれば商品交換を通して生産と消費は常に均衡する傾向にあり、ある労働の他の労働との交換は、正しくその対象化された労働を価値通りに支払うのである。l'aubaine としての私有財産は、なんら労働を附加することなく収入を要求するゆえに、私的所有＝資本の存するところでは、物の価格はその価値よりも大きく、労働者はみずからの生産物を全部買い戻すわけにいかなくなっている。¹⁾ このようなブルードンの考えを《正当》としているマルクスと以下のべるとき「手稿」でのマルクスは明らかにことなる。それにもかかわらず、「手稿」でのマルクスは構成価値説的な生産費説を保持していたように推測されるのだ。

さて、マルクスが(主としてスミスの)《国民経済学》から学んだところによれば、《労働はそれによって人間が自然生産物の価値を増大させるものであり》《労働の全生産物は労働者に属するものである。》(補

1) P. J. Proudhon, 《Qu'est-ce que la propriété ?》 MM. C. Bouglé & H. Morsset 版 pp. 205～242, および chapitre IV.

4. p. 241). それは《私的所有の存在しないという前提のもとでは、労働時間は労賃の尺度であり、また、まだ労賃から区別されていない労働生産物の価値の尺度であった》(補5. p. 254)と説くスミスによっても明らかである。スミスは、さらに商品の価値が賃金と利潤と地代からなり、市民社会を資本の蓄積と土地の私有が行なわれている社会であり、それにもとづいて、労働者の労働が原料に附加するものからその収入をえている階級社会である、といっている。マルクスは、ここにとくに着目して、スミス経済学を、この3つの階級関係を明らかにするものとして、いわば抜書きによって編成がえをやっているのだが、労働生産物の価値が3つの収入の構成であることをのべ、労働者が賃労働者に転化した場合には、全生産物が彼のものとはならないという点をとり入れているように思われる。私的所有、つまり土地が独占され、疎外された労働の蓄積として資本が労働から分離しているという、ひとつの歴史的時期において、このような生産手段の労働からの分離が、賃労働の存立の条件であり、賃労働者の《疎外された労働》の歴史的条件となっていると考えている。すなわち、マルクスはいつている。《……労働者にとってだけ、資本と土地所有と労働の分離は、必然的な本質的な有害な分離なのである。資本と土地所有はこの抽象にとどまることを要しないが、労働者の労働はこの抽象にとどまることを要するのである。》(補4. p. 233)。《こうして労働者にとっては、資本と地代と労働の分離は致命的である。労賃にとっての最低で唯一の必要な額は、労働期間中における労働者の生活の糧と、そのほかに彼が家族を扶養することができ労働者種族を根絶させないだけのものとである。スミスによれば、通常の労賃は、たんなる人間すなわち動物的生存に適するような最低の労賃である。》(補4. p. 234)。こうして私的所有制のもとでの労働力の生産費は、その労働の生産した生産物の価値をいかなる意味においても表示しない。なぜなら、労賃として切りさげられた残りの部分は、私的所有への貢物として搾取されるからである。マルクスは従っていつている。《概念上からいえば、地代と資本利得とは労賃がこうむる控除額である。》(補4. p. 243)。このようにスミスを利用し変形したマルクスは、ブルードンと同じようないい方で次のようにいつている。《すべてのものは労働によって購買されるのであり、資本は集積された労働以外の何物でもない。……しかし……労働者はすべてのものを買いうるどころでなく、彼自身および彼の人間性を売らざるをえないのだ……》(補4. p. 241)。このようにいうマルクスが「神聖家族」のなかで次のようにブルードンを高く評価するのは、けだし当然といわなければならない。《ある対象の生産についやされる労働時間はその対象の生産費の部にいれられるということ、ある対象の生産費はそれについやされた額、したがって、競争の影響を除外すれば、それが売られる額であるということ、これらのことの洞察なら、批判的批判にもできないはずはない。国民経済学者たちでは、労働時間や労働の素材のほかに、さらに土地所有者の地代も、資本家の利子と利潤とともに、生産費の部に入れられる。このうち、利子と利潤とは、ブルードンでは抜けている。そのわけは、私有財産が、彼ではぬけているからである。それゆえ、ただ労働時間と支出とがのこるだけである。ブルードンは、人間の、活動としての活動の直接的定である労働時間を、労賃と生産物の価値決定との尺度とすることによって、ふるい国民経済学では資本と土地所有という事物的な力が決定的であったのに、人間的な側面を決定的なものとしている。》(補. p. 254)、同じく労働者はもはやその生産物を買戻しえないことを指摘したマルクスは、しかし労賃にまで切り下げられた残りの価値部分についていつているのであるから、つまり事実上、絶対的剰余価値についていつているのであるから、ブルードンを、《国民経済学の枠内での国民経済学の批判》と評しえたのである。こうして労働力の生産費は、労賃として商品の生産費の一部に入れられることになると、その物の生産費はもはや《人間と関

連させて》考えられないことになる。

さて、このような生産費に競争の影響が加わると、価格はもはや生産費とさえ関連をもたなくなる。それは、もはや生産費と競争の関係によってきまる (MEGA. III. S. 437)。マルクスは「手稿」において、労賃、利潤、地代等の大きさをきめる なんらの基準もないことを強調している。こうして現実の商品の価格は、《価値の本来の領域》とは、もはやまったく関連を失っていることを指摘することによって、労働価値説を否定したのである。したがって、この労働価値説の否定は、うらに労働による価値の規定を秘めたところの否定なのである。

III

さて、紙数もつきたのでまとめなければならない。マルクスは以上のことを《疎外された労働》の帰結としてのべていることは周知の通りである (補 4. pp. 312~313)。以上のごとき労働の対象化として生産物に対する。この労働者の疎遠な関係は《今日の労働そのものの本質》(補 4. p. 243) の、《疎外された労働》の必然的な帰結なのである。

一方においては、労働者は《……資本も地代ももたず、ただ労働によって……》(補 4. p. 243)《売らなければ消失してしまう》《一個の商品》(補 4. p. 251) としての労働によって生活するプロレタリアがあり、他方では《労働およびその生産物に対する支配力として》の資本が対立する。しかし、この《生産の対象および生産そのものに対する資産家の関係は》《労働のその生産の対象に対する》《第 1 次的関係のひとつの帰結にすぎない》(補 4. p. 302) 労働者が生産行為そのものにおいて自分自身を疎外しているからである。マルクスは《一般に人間からその類的存在が疎外されるという命題は、ある人間が他の人間から、どの人間も人間的存在から疎外されるということを意味する。》(p. 309)。この命題の具体的内容は、資本、土地、労働を基礎の 3 要素の分離であり、結局は、この資本と労働の資本制的生産関係であり、また同時に、この関係の生産とした交換における労働者を含めた各商品所有者間の関係であることは、以上の叙述で明らかであろう。

マルクスはいっている。労働において人間は類的存在としてみずからを確証するし、人間の一切の文化は豊かにされていくものである。しかし、私的所有のもとにおいては、その労働は疎外された労働である。そこでは労働の所産である歴史的な生産関係のもとで、この労働の人間の本質は実現されないのである。たとえば、《分業は労働の生産力、社会の富と文明をたかめるにかかわらず、それは労働者を機械にまでひきさげる。労働は資本の集積を、したがって社会の富の増大をよびおこす。しかるに、それは労働者をますます資本家に隷属させ、いっそうはげしい競争になげこみ、彼を過剰生産の狩猟の中へおとし入れるのである。》(補 4. p. 242)。したがって、《疎外された労働》の回復、疎外された類的本質のとりもどきは、生産力と生産関係の矛盾の止揚を意味しているのである。マルクスが商品を労働の生産物としながらも労働価値説を否定したのは、むしろ、概念の未熟のためであるが、この誤りの積極的理由は、概して価値をこのような資本制的な矛盾の表現としてとらえたからだ、といえないだろうか？